

第3回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成29年6月8日(木) 15:00～17:00
場所	青森県警察本部6階 教育委員会室
出席者	<p>《委員》敬称略 13名 (欠席2名)</p> <p>天内 不二子 上澤 司 長岡 俊成 岡 詩子 菊地 倫子 白戸 美也子 奥島 涼子 出崎 真里 柏谷 至 松本 大 住吉 治彦 増田 由美子 工藤 清子 (奈良 陽子 春藤 千秋)</p> <p>《青森県教育次長》 和嶋 延寿</p> <p>《事務局》 5名</p> <p>渡部 靖之 (生涯学習課長) 渡部 泰雄 (学校地域連携推進監) 佐々木 昌生 (企画振興グループマネージャー) 他2名</p> <p>《その他》 2名</p> <p>早野 英明 (学校教育課 課長代理) 小森 直樹 (総合学校教育センター 教育活動支援課長)</p>
内容	<p>1 開 会</p> <p>2 教育長挨拶</p> <p>3 案 件</p> <p>(1) 本県における若年層の意識・現状について (2) テーマについての意見交換 (3) 先進事例実地調査先について (4) 今後のスケジュールについて</p> <p>4 その他</p> <p>5 閉 会</p>
配付資料	<p>次第 青森県生涯学習審議会委員名簿 座席図</p> <p>資料1 第2回審議会における意見の整理 資料2 若者の学習・生活体験と県内定住に関する県民の意識調査報告書概要版 資料3-1 先進事例実地調査候補先について 資料3-2 先進事例実地調査候補先補足資料について 資料4 今後のスケジュールについて</p> <p>〈参考資料〉</p> <p>1 青森県基本計画未来を変える挑戦平成29年度プロモーション編について 2 地域未来創生センターフォーラム「人口減少社会における持続可能な地域づくりを考える」</p>

会 議 の 内 容

(◆会長 ◇委員 ○事務局)

案件（１）本県における若年層の意識・現状について

◆会長

今日の案件としては、４つ予定されている。本審議会として先進事例の調査先をある程度決めることと、今後のスケジュールを確定させることが、今日の主な案件となっている。それでは、事務局から説明をお願いします。

○事務局

(資料１「第２回審議会における意見の整理」について説明)

◆会長

議論全体としては、次の資料の説明を受けた上での方がいいと思われるので、資料２の説明を引き続きお願いしたい。

○事務局

(資料２「若者の学習・生活体験と県内定住に関する県民の意識調査報告書概要版」について説明)

案件（２）テーマについての意見交換

◆会長

私は資料２の調査の調査研究顧問を担当していたのだが、今回の審議会と関連で３つのことを紹介したい。まず、生涯学習課で若者にターゲットを絞って調査したのは今回が初めてではないかと思う。しかも、回収率３５％というのは、若者を対象にした調査としては非常に高い方である。青森の若者の現状を知る意味ではかなり貴重なデータと言える。

２つ目は若者の自己有用感について。私が担当した箇所では、栃木県教育委員会が小中学生向けに開発した尺度を青森の若者に使用してみた。すると、自分が周りの人の役に立っているかどうかという意識が、いろいろな行動に結びついているということが分かった。例えば、職業を探すときに自己有用感の高い若者は親とか親類、学校の先生に相談する割合が高いのだが、自己有用感の低い若者は、そういう人たちに頼ることができずにハローワークや求人サイトに頼る割合が高くなる。大変興味深い結果である。また、自己有用感をどのように高めていくのかということについては、本審議会でもずっと議論が行われてきたことであるが、今回の調査では、体験活動を経験している若者は自己有用感が高く、反対にそういう経験があまりない若者は自己有用感が低い傾向にあるということがわかった。もちろん、それだけが要因ではないと思うが、生涯学習的なアプローチというものが大変重要なのだということを強く感じた。

３点目は若者の県内定住意識について。報告書概要版の１８ページ以降は弘前大学の李先生が執筆された分析になるが、県内に住みたいかどうかという意識を軸にして分析をされている。私個人として大変印象に残ったのは、若者の県外流出には２つのパターンがあるという分析だ。社会的に恵まれた人たちが活躍のチャンスを求めて県外に出るという、ある意味合理的な行動のほかに、そうではない若者、例えば学歴が低かったり、現在の生活を不幸に感じていたり、職業的に不安定な人が、将来の見通しもなく県外に出ていきたいと考えているのである。県内に若者が住み続けてもらうための取り

組みの一つとして、社会・経済的に、あるいは心理的に不利な立場におかれている若者たちをどのように扱っていくのかが重要な課題となるのではないか。

◇委員

最近、意識が高い人と話題があった新書を読んで、意識が高い人というのは地元に戻ってくる確率が高いのではないかと感じている。何か共通の会みたいなのを地域の中でどうにか互いのためにサポートするのが大事なのではないかと思う。地元にある薬研温泉で祭りやお囃子をやりたいという願いをしたところ、地元の意識の高い若者たちが中心になっていろいろな企画を考え、外から音楽家を招いてみたりとかプロジェクトマップングをやったりとか、混ぜ合わせたことによって爆発的な集客を得たイベントが実現できた。どうにか結節点をつくって、コーディネートやマッチングするような人材を青森県の中でもっと育成していくことが、温度差とか意識の乖離というのを上手く解決できるのではないか。今までの活動を踏まえて、どうしても地域活動に対する意識の格差というものにも意識の高い人とそうでない人には大きなギャップがあるので、そこにどういった具体的な方策を考え、どのように役立てさせるのかが大きな鍵になるのではないか。

◆会長

同じ地域の中でも環境の違いとか境遇の違いとか考え方の違う若者がいる中で、お祭りというイベントを通して、今まで全然接触のなかった人たちが、接触して新しいことができるという大変興味深い実践をされている。

◇委員

今の調査結果に関連して、自己有用感というのがキーワードになる。その自己有用感は体験的な学習をこれまでしてきたかどうかというところが深く関連しているということであるが、確かにそうなのかと感じた。しかし、そこで問題になるのは、体験の質をどう捉えていくのかが、まず一つ重要になってくると思う。さらに体験に関しても、実際に体験の有無が自己有用感につながるのであれば、体験自体に格差があるはずなので、家庭における格差や地域の中での格差が、県としての課題にもなっていくのだろう。

体験的な学習がキーワードになり、体験学習の経験が多いということは、おそらく地域に社会教育的な資源とか、社会教育的な受け皿が、たくさんあるのだろうと思う。そういう意味では地域に社会教育的な資源や受け皿をつくることにもつながる課題なのではないか。また、体験的な学習の経験が多いということは、授業以外での体験の機会が開かれているということが言えるのではないか。さらに、体験的な学習の機会が多いということは、学校との連携も盛んなのだろうと推測できる。その辺りが攻めどころとなるのではないか。

◆会長

体験学習そのものが影響を及ぼしているということもあるだろうが、体験学習が活発にできる地域であるということがあろうと思う。学校との連携が上手くいっているとか、職場体験であると、会社が地域の子どもたちを受け入れてくれる土壌があるとか、そういうところが影響しているのかもしれない。もちろん、その一方で親の経済的な格差が、体験活動を通じて子どもの自己有用感に影響を及ぼしていることも十分に考えられる。この審議会としては、地域全体として体験活動にしても、ただ行えばいいということではなく、質を上げることや学校と地域の連携を深めていくことが重要になってくる。

◇委員

私の地域には、公立大学の学生がインターンシップで来ている。今別には荒馬という伝統的なお祭りがあるのだが、その若者は寝食をともにしながら地域の人たちと交流をしていて、地域の人たちもその若者に対して様々なサポートをしている。祭り自体で関わってきたことと、新幹線開業のPRや町の観光のこととかも率先して参画している。そのようなことが関連して、地域のよさを地域全体で引き上げてくれた人たちがいて、やはり寝食をともにするという交流が、強い関係をつくっていくのだと感じている。地域の人他に、大学の先生とかもすごくバックアップしてくれているので、そのような人が地域の若い人たちを引っ張ってくれることに大変感謝している。

◇委員

今このアンケート調査結果を見て、八戸でボランティア活動に関わっているが、高校生にしても大学生にしてもほとんど地元の人には来ない。その意味で、この調査結果には疑問を感じていた。他県に出て行って初めて青森はいいところだということが分かって戻りたいと考える人たちが多いのではないかを感じる。ボランティアは、強制的にやらせる方法があるかと思うが、「やりますか」と聞くと、地元の高校生は来ない。それを受け入れられて巻き込みながら仲間をつくっていくことが基本的に大事だと感じる。

先ほど格差の話があったが、大学に行きたかったら自分で働いて、奨学金をもらうという発想をしなければ伸びないのではないか。その環境で生まれたのであれば、そこで一生懸命やるという発想が大事だ。その生きがいとかやりがいとか考え方をどのような方策で行っていけばいいのかということから行っていけばよい。

私の娘は小さい時から三社大祭に出ているから、祭りになると帰ってくる。小さい時から関わらせていけば、手伝いにいけると思う。そのような地域を最初からつくっておくということが大事だ。幼稚園から中学校までは、地域にあるのだから、強制的にでも町の各地区の祭りに親たちも一緒に関わっていくことが大事だ。そこを行わないで、急に中学生、高校生になってやらせようとしても、3歳児の素地が決まってしまう子ども達にやらせようとしても無理だを感じる。教育の原点は3歳児で決まると言われているとおりに、その時期にいかにして親が、もしくは地域がその環境を整えてあげることが大事だ。そこを重視していけば地域は盛り上がっていくのではないかと思う。

私は、企業として青森県はもっとしっかりしなければならないと感じている。子どもたちが生活していくためには、正社員で雇えるように県内の企業がそのような考え方になかったら、若者が県外に出ていくのは当然だ。私は商工会議でも「会社側を変えましょう」と話をしている。子どもたちがしっかりと給料をもらって、休暇も取れるような会社にしましょうと話をしている。やはり若者の受入態勢をどうするかという部分も考えていかないといけない。

◆会長

今のお話の中には多くの指摘が含まれているが、一つは小学校に入る前の子どもたちに対する支援の重要性であると思う。

◇委員

私は保育園の園長として、保育園のそばで三社大祭の山車をつくっているところがあるので、子どもたちを見せに行ったり、祭り当日には子どもたちと一緒に山車を引いて参加したりしている。そうすると、小学校に行ってから太鼓をたたいたり、笛を吹い

たりしてつながっていつているのを見ていると、やはり小さい時からの教育は大事だなと感じる。今、私の地域では、地域連携密着型教育を推進していて、学校と地域が一緒になって子どもたちを育てている。それを受け入れる地域の方も、もっとそのことについて勉強して中学生を受け入れるという体制にしなければならないと感じている。学校の先生たちが地域に入り、子どもたちの目線で地域を見ていただいて、深く入り込んでいただきたい。地域に何があるかということ子どもたちに知ってもらい、自己有用感を高める部分として何があるのか、その子にとって興味を持てるものが地域にはたくさんある。それを知ることによって、ここが自分には合うなとか、賑わいがあるところは苦手だとか、地域の資源をいかにして子どもたちに教えるかということが、周りの大人だったり、地域の人だったり、教師だったりするのではないかと感じている。

◇委員

青森はねぶた祭りが有名だが、学校や町内会単位でも小さなねぶたをつくっているところがある。私の地区では、小さい頃からお母さんと一緒にねぶたをつくることから関わってもらっている。裏方の人が何かお手伝いしている様子とか町内会運行の時のいろいろな人の助けを借りながら運行できるということを小さい時から目を見て、体験して、ねぶたの運行にこんなにも多くの人に関わっているのだなと知ってもらい、県外からも多くの人が見に来るのだなということを理解できるようになると思う。苦勞しているところを見れば、本当の意味で楽しく参加することができるのではないかと思う。小さい頃ころから関わっていけるのは、やはり祭りなのではないかと思う。ボランティア活動というのは、自分が一生懸命やったことに対して、誰かが喜んでくれるというのが目的だと思う。そういう情報をいろいろな人が聞きつけて、簡単に参加できるような仕組みがあれば、参加しない若者が出てきてくれるようになるのではないかと思う。これまで議論されてきたように発言できる人や地道な作業しかできない人がいるわけで、ボランティア活動に関しては地道にやっていける人とか、上に立って何かしなくても、この活動をすればいいのだということをしてもらうだけで、自己有用感につながっていくのではないかと考える。

◇委員

私の息子は高校生の時に県内で夢を叶えることはできないと県外に就職し、3月に東京へ行ったのだが、毎日のように青森に帰りたと言っている。やっぱり離れてみて青森はいいところだと改めて再認識しているようだ。今懸命に東京で仕事をしているのだが、ゴールデンウィークに帰ってきたときに、子どもの頃に見たことがないさくら祭りに行きたいと言ってきた。花はすでに散ってしまっていたのだが感動して帰ってきた。

この調査結果の話をしたのだが、青森県についてどんなイメージを持っているかでは、自然が豊かである、安心して暮らすことができるとか、まさにそういうところを息子は感じているのではないかと思う。この伝統的な祭りや伝統芸能が盛んであるという回答も、すごく割合が高いと感じた。やはり若者は祭りが好きなのだなあと感じた。しかし、現在県立高校の編成の話題が各地で盛んに行われているが、特徴ある学校がどんどん減らされていくという印象を持っている。いろいろな職業の方からお話を聞くと、口々に後継者がいない、若い人たちがこの職業をやってくれないと嘆いていた。特徴ある学科をもった高校を大切にされた方がいいのではないかと感じる。人材育てという面で見たら、いくら子どもが少なくても、将来後継者がいないということを見ると、地域に根ざした職業が無くなっていくということである。青森県にはこのような仕事がある

ということを教える場を大切にしなければならない。

保育園の話聞いていて、保育園は地域にとっても密着している。それが、小学校に入った段階で急に教室の中に閉じ込められてしまう。厚生労働省から文部科学省に移ったというのがまざまざと見えているという印象がある。保育園の先生は小学校の先生に子どもの話を伝える機会がある。小学校の先生も保育園に行き、友達の様子やどのように地域とつながっているのか、その様子を観察して、厚生労働省から文部科学省の切り替わりもスムーズに行えるような教育がとても大切であると思う。

あと、県外に進学したいという割合が高いということだが、大学地元卒というものを拡張していき、地元卒で入学した若者たちにいろいろな職業について研究してもらい、県内のいろいろな職業に関わっていける土台作りというものにつなげてもらえないかなと今回の調査結果を見ながら感じた。

◆会長

ここで、私なりに整理をすると、まずは、体験活動の重要性、地域の活動に参加することが、若者の自己有用感や自尊感情を高めることにつながる。さらにそれが、地域において活躍するきっかけになっていることが改めて確認ができた。では、それをどのように上手く広げていくのかということが審議会としての課題となる。今まで出された意見の中では、学校や地域、企業との連携の強化といったことを何人かの委員がいていたのは印象に残っている。また、いわゆる学齢期の子どもだけでなく、学校入学以前の子どもたちに対するフォローアップというのも、組織的に応援できないのかというのが新しい論点だった。学校の現場にも問題や課題が多いので、そういう部分での連携・強化もあるし、企業との関わりの部分についても深刻に考えていかなければならないと思う。

一旦ここで案件2を終了させてもらって、休憩の後、案件3に入りたいと思う。

<休憩>

案件（3）先進事例実地調査先について

◆会長

それでは、後半の案件に入りたいと思う。後半は案件3と4を中心に議論していきたい。先進事例調査をこの審議会として組みたいと考えている。事務局から説明をお願いしたい。

○事務局

（資料3-1「先進事例実地調査希望先について」及び資料3-2「先進事例実地調査希望先補足資料」）

◆会長

それでは、各委員から提案いただいた調査希望先について簡単に説明いただきたいと思う。まず、私が提案した愛知県の新城市だが、若者条例を施行して、それに伴った各種の施策を実施しており、自治体全体として若者を施策の中にどう巻き込んでいくのかという例としてよいのではないかと思い提案した。取組として特徴的なのが「若者議会」で、16歳から29歳までの若者たちに集ってもらい、市長に対して政策を提言する場をつくっているということだ。

二つ目の希望先は、NPO 法人シブヤ大学である。ここは、名前の通り渋谷にあるのだが、運営している人も参加する人もほとんどが 20 代と 30 代というのが最大の特徴である。若者による生涯学習活動であり、ターゲットになる参加者も若者というのが非常に興味深い。他方で、大都市の事例であり青森にどれほど応用が可能かという懸念が多少ある。

◇委員

私は、前回の資料の中から候補を選定した。岩手県盛岡市にある NPO 法人の取組である。キーワードは「自己実現」である。消極的な若者を巻き込んでいく取組であるという点、それから、持続可能な地域づくりの取組となっているという視点から選定した。二つ目は「いいなかどまり会」である。「グループ交流」がキーワードになっている。若者だけではなく、いろいろな世代が一緒になっての取組となっているという点と持続可能な地域づくりになっているという点で選定した。

◆会長

本日欠席の奈良委員からは、ご自身が関わっている取組を紹介いただいている。機会があればぜひ見に来てほしいという要望であると思う。次に、長岡委員から御説明いただきたい。

◇委員

「つるた街プロジェクト」に以前から関心があった。なぜ選定したかというのと、私が代表を務めたときは、楽しいという気持ちで行っていたのだが、だんだんいろいろなことを地域の方から背負わされていき、毎年のように「まかせる」と言われると、そんなつもりではなかったの、辞めていく仲間がいるという状況になっている。そういう中で、街中をにぎやかに、みんなが楽しめるものをいろいろと企画されているので、楽しさというところに原点回帰したいという自分自身がいる。

◇委員

二つの調査先を希望した。一つ目は「フリースペースたまりば」である。2001 年に青森市で「子どもの権利条約フォーラム」を行ったときに、イベントとして、たまりばの運営に携わっている西野さんに来ていただいた。当時学童保育に来る様々な子どもたちにどう寄り添って対応したらいいのか悩んでいた時期があった。西野さんの講演では、たまりばを立ち上げる前に、いろいろな経緯があり、様々な環境に置かれた子どもたちに寄り添ってきたというお話が、私自身の心に響いた。青森の若者や子どもたちが生き生きと元気に毎日を過ごすためには、課題を抱えている若者や子どもたちに寄り添ってあげられる大人が必要ではないかと考えている。私たち大人がいろいろな子どもたちに寄り添うということをどのようにすればいいのか、その視点をここに行けば学べると思、選ばせてもらった。

二つ目は、「ゆう杉並」である。学童保育の仕事をしているときに、小学生だけではなく、卒業した中学生も巻き込んでいくためにはどうすればいいのだろうと悩んでいた時に、この場所を人伝に聞いたことがあり、選ばせてもらった。

また、現在、絵本と音楽のコラボの活動を趣味で行っており、20 代や 30 代の若者と接する機会が多くなった。審議会が若者をターゲットにしているので、敢えて、どのようなことがきっかけで音楽活動に関わっているのか、活動で感じていること等聞いてみることがある。若者の話では、大人との出会いが自分を変えたとか、今思えば自分の親

は自分に対しいろいろな要求をしていなかったことがよかったのかも知れないといったことを聞かせてくれた。先進事例もいいのだが、身近にいる若者に実際に活動している様子を聞いてみる機会があってもいいのではないかと思う。私たちのヒントになるものが見つけられるのではないか。

◆会長

青森にいる若者に意見を聞く場があってもいいのではないかというのは、大変魅力的なアイデアだと思うので、あとで議論したい。実地調査希望先について、説明を続けていただきたい。

◇委員

それぞれの団体の活動が素晴らしく、なるべく、一網打尽で行けそうな自治体を選定した。気仙沼市の NPO 法人底上げというところは、主に高校生の活動を支援している。高校生のフリースペースのたまり場があり、高校生と大人の交流、高校生主体のプロジェクトがある。高校生自身が企画した課題解決型のプロジェクトを支援している。さらに、若者たちがスタッフとして関わっている。

続いて、Ishinomaki2.0 だが、石巻では震災後に若者が集まって、いろいろな形で地域づくりやまちづくりを行っている。その代表格が Ishinomaki2.0 ではないかと思う。この審議会に関わってくる活動としては、「いしのまき学校」だと思う。高校生が自分達の地域を大人に話を聞いたりして調べ、まとめたりするような活動であったと記憶している。また、移住の支援とか高校生の交流系のイベントなども行っているようだ。

かぎっこプロジェクトは、青森にもあるが高校生カフェを運営している。また、高校生が地域に出て、大人の話聞いて、自分たちで考えていくという企画をしている。こちらも高校生の取組を支援している団体である。スタッフも若者がいるようだ。

TEDIC では、若者が主体となった団体で、比較的社会的困難を抱えた子どもを対象とした活動をしている。生活保護世帯等の子どもの学習支援や子ども食堂を運営している。以上が石巻市にある団体となるが、交通が不便な場所であるので、少しどうかなと思う。

山形県川西町のきらりよしじまネットワークは、地区経営母体としてのいわゆる町内会にあたる組織を NPO として機動力を高めていこうと運営している。この審議会に関わるところでいうと、各町内会から若者を事務局として出させ、事務局活動を通して育てていくという仕掛けをしている。

つづいて、同じく川西町に東沢地区というところがあって、東京の町田市の子どもたちを山村留学させている。ただ、若者ということではなく、子どもと保護者の交流がメインとなっているので、本審議会のテーマとは若干離れるかもしれないのだが、選定基準の県内の若者と県外の若者の交流という視点で、実践されているところを見つけられなかったのが、この取組を希望先として選定した。

次のぷらっとほ一むでは、若者の居場所づくりを主な活動として行っている。引き籠り傾向にある若者やニートの若者を対象にフリースペースを開放している。ここの特徴としてはかなり学びにも力を入れているところである。ここでいう学びとは勉強のことだけでなく、読書会を開催し社会問題に関心をもってもらうとか、若者が興味を抱いていることをみんなで深め合っていくといったイベントを行っている。

◇委員

今別町若者プロジェクトは、町役場の職員なのだが、大学卒業後に地元に戻ってきた職員とか、東京に就職して辞めて帰ってきた若者とかが多い。話を聞くと、町のために何かしたいし、立ち上げたいと考えているのだが、そういう若者を町が育てようとする身近な取組なので、希望先として選定した。

私の一押しは、冒頭に紹介した若者の取組なのだが、6次産業を手掛けようがんばっている。ワカメの加工やいのしし牧場に行き、若者は事業主になりたいという意気込みをもっている。実地調査として遠くに行くのもいいが、今別にもちょっと寄れるのではないかと考え希望先として紹介した。若者は、今すごく大変みたいで、いのししの世話や海に行ってワカメを採るなどヘトヘトになりながらも、一生懸命がんばっているの、町を挙げて応援している。そのことが持続可能な地域社会づくりになっていくのではないかと期待している。

浅虫の方は、浅めし食堂での高齢者と若者4人の取組がテレビで紹介されているのを見た。かつては、賑わいがあった浅虫温泉であるが、高齢者や子どもたちをどのようにつないで活性化させているのか調査してみたいと思い、希望先として挙げさせてもらった。

◇委員

実はPTA活動に携わってきたのだが、そこで知り合った西川さんがNPOを立ち上げ実践されているので、私もサポーターとしてボランティアをさせてもらっている。何もできない引き籠りの中学生とかその保護者のためのカフェや婚活のためのイベントを企画している。この取組は青森市内だけでなく、県内にポツンポツンとあった方がいいなあと感じている。

◆会長

まず、基本的な考え方として、近場の県内だったり、市内だったりの候補先に関しては、逆にこの予算を使って行くというよりは、ここにゲストとして来てもらうことも可能なので、とりあえずは県外の候補先を考えたい。

その上で、どういった活動を視察するののだが、取組の内容を見ていくと、三つぐらいのパターンがありそうだ。一つは、地域おこしとか地域の活性化、持続可能な地域づくりの事例になっているという取組。二つ目は、今現在課題を抱えている若者をサポートしようとする動き。三つ目は、重なる部分もあると思うが、若者自身が活動の核になっている取組。この三つのタイプにまとめられるのではないかと思う。このバランスを考慮しながら、地理的なことも配慮しつついくつかの候補を絞っていきたいと考える。

◇委員

やはり、会長が推薦している愛知に行って、若者条例という取組がどういうものなのか調査してほしい。たぶん、地域が活気づいてきたら次のステップに移行しているのではないかと思う。地元の取組は、それぞれ分かれて調査できるのではないか。

◇委員

実は、以前に何名かの方に視察に来ていただいたことがある。活動している者にとって、視察に来ていただけると活動の励みになる。

◇委員

距離的に遠いのだが、渋谷に行って調査したいという気持ちがある。

◇委員

若者の感覚が大丈夫なのか。

◇委員

逆に、その感覚の違いが参考になるのではないかと思う。様々なところが違うと思うのだが、その違いを見てみたいと思う。どこを見ても、そのまま導入できないと思っているので、少しの違いは、さほど気にならないと考えている。であれば、いっそのことかなり違う所をこの機会を生かして調査してもいいのではないかと考える。個人で行くより、県の審議会委員として行くとかなり詳しいことが聞けるのではないかと期待する。たくさんの都会の若者に会えると思うので、逆に青森のことを知ってもらう機会としたい。

◆副会長

私も新城市の取組を見てみたいと考えている。取組の中に成人式でのPRということが紹介されているのだが、自分から進んで参加しない消極的な若者に対してどのようにアピールしているのか大変興味がある。若者政策ワーキングの取組に興味がある。

◆会長

新城市は自治体としてそんなに大きくはないと認識しているが。

○事務局

人口は4万7千人である。比較的小規模の自治体である。

◇委員

県内では十和田市と同規模くらいだと思う。調査対象地として相応しいのではないかと。

◆会長

東日本大震災が一つのきっかけにはなっていると思われるが、石巻でいろいろな活動が若者主体で立ち上がっているというのは大変興味深い。

◇委員

復興関係で若者に限らず市民活動にかなり意欲的な人たちが集まっているのは確かである。その中で若者は若者同士で、地元の人たちと一緒にいろいろな活動を立ち上げようとしている。

◆会長

県外から来た人が関わっているケースが多いのだろうか。

◇委員

私も詳しくは分からないところもあるのだが、Ishinomaki2.0とか地元の人がリーダーになっている場合もあるし、TEDICは県外の人が代表を務めている。

◆会長

本質とは違う議論なのだが、折角予算をかけて調査に行くのであれば、複数の箇所に行ければいい。石巻はさまざまな活動が一カ所で見られるという意味では魅力的だ。

◇委員

新城市と渋谷は決定でいいのではないか。あとは、石巻をどうするかだと思う。県内の取組は、自家用車を使って各自でということではないか。

◇委員

シブヤ大学については、このシブヤ大学方式がいろいろな地域に普及している。広島、北海道、沖縄などでシブヤ大学方式を取り入れて行われている先導的な取組となっているので、参考になるのではないか。

◆会長

シブヤ大学方式を地方都市にもっていったときにどうなるのか多少は聞き取れるかもしれない。

◇委員

私もかぎっこプロジェクトや Ishinomaki2.0 の取組は気になっていた。青森にも似たような事業はいろいろとあるのかもしれないが、高校生とIターンやUターンの人たちと人間関係をつくれる場所をつくっているというのは興味深い。

◇委員

Ishinomaki2.0 は、NPOではなく一般社団法人であるので、その取組には興味がある。

○事務局

今までのお話の中で、新城市とシブヤ大学、石巻市と候補を絞り込んでいただいています。この3つが可能かどうかを検討したいと思います。

◆会長

1回に行く人数を減らして3箇所行くということが可能かもしれない。事務局の方から3箇所を検討することなので、新城市と東京・川崎近辺と石巻という候補で、予算上可能なのか、視察先で受け入れてもらえるのかどうかを事務局で検討してもらおうということではないか。

(異議なし)

案件（４）今後のスケジュールについて

◆会長

それでは、予算の問題と候補先との交渉については事務局にお願いすることとして、具体的に日程等を詰めていくことにしていきたい。案件４の今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いします。

○事務局

(資料4「今後のスケジュールについて」の説明)

◆会長

候補先が決まった段階で一度審議会を開催し、調査内容等について議論いただくことにしたい。それでは、予定されていた案件については議論いただいたのだが、まだ少し時間があるので、発言いただいていない委員から今日の内容を振り返って一言お願いできないだろうか。

◇委員

今日の審議会の中で自己有用感と体験活動の関係について議論されていたが、とても印象に残った。私が関わっている障がいのある子どもたちの中には、自己有用感が低い子どもが多い。教育活動の中でも課題の一つとなっている。学習活動の中には体験活動を多く取り入れて行っているの、私たちのやり方に間違いはなかったのだと安心した。最近の体験活動の新しい取組として、交流及び共同学習というものがある。もともと学校間交流を行ってきいて、居住地校交流というものを行っている。養護学校は広範囲の地域から通ってくるので、その子どもたちが自分の住んでいる家の学区の小学校や中学校へ行って交流するという取組を行っている。共生社会が叫ばれる中で、国や県が推進している取組である。そのようなことを行う中で、子どもたちは一端は養護学校で生活するが、高等部を卒業した後は居住地に戻らなければならない。普段から、地元の子どもたちとのふれあいというのが非常に大事になってくる。その取組がようやく始まったところなのだが、それがだんだんと地域の方々に知ってもらうことで、地域の方々の目が変わってきていると感じている。学校間教育で終了するものではなく、やはり地域を巻き込むとか、地域を耕すとか、布石を投じるような活動がどんどん広がってほしいと感じている。

◇委員

体験学習の話が出ていたが、大事なことは、地域の学習財や地域の人材と協働体験学習の事前、事後の指導である。そして、子どもたちへの内面化を図っていくことと、さらに気持ちを深化させていくことである。やはり、事前、事後の指導を学校でしっかりと行い、横の連携や縦の連携を小学校から行っていくと、さらに効果が増す。ただ、同じ取組であっても発達段階に応じて子どもたちの受けとめる感覚が異なるので、将来の夢とか職業とか進路選択に大きく影響してくると考えている。アプローチの仕方もあると思う。

あとは、学校主体でという話が多く出されていたが、中学校は学習指導もあり部活動もあり、教師たちは思った以上にハードで自分の家庭よりも子どもたちの指導に時間を割いてくれている。私は七戸町の中学校に勤めているが、ここでは千人オーケストラをやろうということで、祭りに便乗しながら、小学校で吹奏楽部に所属していた、中学校でも吹奏楽部に所属していた、大人になってからも趣味を生かし、教育委員会が中心となって町で企画をする。そうすると、年齢も幅広く、人生の大先輩から小学生まで参加して行うという住民参加型のイベントになる。やはり、断片的に学校だけで行うということではなく、縦の連携と横の連携ができるように組織づくりをする企画をしてくれるところがあれば可能なのではないかと思う。

それから、最近、子ども会の活動が大変薄くなってきていると感じる。以前は、地域ごとの祭りがあった。七戸町にも地域ごとの祭りがあった。その度に運動会も企画され

ていたのだが、七、八年が経過したら、地域の祭りや運動会がなくなっている。子ども会の活動さえなくなっているというのが現状である。少子化の影響だと思うのだが、少子化ということは、子ども会を企画運営していく中堅のリーダーたちが薄くなっているということである。そここのところを解決するためには、やはり、個々の地域ではなく町で、生涯学習課と学校と青年団、商工会議所とタイアップして、組織をつくっていき、連携していかないと苦しいものがあると感じている。

◇委員

この審議会に出ている中で、素朴に青森の若者の意見をもっと聞きたいと思った。それで、先ほどそのような話をしたのだが、先進的なものを学び、これからの施策に生かすというのも一つの方法だと思うが、今現在、ここ青森に住んでいて、生きている若者たちが何を考えているのか、青森が嫌いと思っている若者もいると思う。今の若者は何を感じているのか、自分もかつては若者だったが、果たしてかつての若者は今の若者のことをどこまで理解しているのかと思うところがある。時間の関係、予算の関係があると思うが、生の声を聞く機会があればいいのではないかと思う。

あと一つは、このスケジュールを見ると、最終的には報告書をつくって、生涯学習施策について意見交換というものがある。話を聞いていると、委員の皆さんは様々な分野で活動をされていて、いろいろな意見が出てきている。でも、これは生涯学習課だけではなく、他課も絡んでいかないと、学校教育のことであったり、定住のことであったり、そういうものが生涯学習課と他課とどういう形で連携されていくのか、折角出された良い意見は、どのように生かされていくのかを知りたい。

○事務局

審議会で議論いただき報告書としてまとめたものは、教育委員会の施策に生かすというのが第一の目的であるが、当課で行う事業をつくる時に、当然中身によって企画政策部などの、必要な知事部局との連携という形になるので、教育委員会だけの事業になるとは思っていない。事業を組むときに連携という形で行われていくことになる。

◆会長

我々としては、これは生涯学習になる話ではないから、話題にしない方がいいということはしない方がいいということだと思う。この審議会は条例で規定されている審議会なので、県の施策の中では重く位置付けられている。この審議会では他分野との連携の重要性について指摘することは、生涯学習課が他の部局等と連携をはかる際の援護射撃になるのではないか。あまり我々は生涯学習をあまり狭く考えずに議論していきたい。

委員全員から意見をいただくこともできたし、予定されていた案件すべてについて議論いただくことができたので、進行をお返ししたい。

4 その他

○事務局

次第の4「その他」ですが、事務局からは特にございませぬ。

5 課長あいさつ